

芸術祭五十年のあゆみ

	<p>昭和二〇年 (一九四五)</p>	<p>文化行政</p>	<p>社会一般</p>
<p>昭和二二年 (一九四六)</p>	<p>一一・三一 文部省社会教育局に 芸術課設置</p>	<p>芸術祭</p>	<p>八・一五 天皇「終戦」の詔書放送 一〇・一一 初の戦後企画映画「そよかぜ」封切(主題歌「リングの唄」大流行) 一〇・一 雑誌「文芸」等復刊</p>
	<p>一一・一六 「当用漢字表」、 「現代かなづかい」内閣訓令・告示</p>	<p>第一回芸術祭 文部省社会教育局今日出海芸術課長の発案によって「芸術祭」が発足。演劇、音楽、舞踊、能楽の各ジャンルから一二〇余の公演が、芸術祭主催公演として参加。 期間は、九月一日から一〇月</p>	<p>一・一九 ラジオ「のど自慢」放送開始。村山知義ら、新協劇団再建 二・二八 アメリカ映画「キユリ夫人」 「春の序曲」公開 四・二二 漫画「サザエさん」連載開始(『夕刊フクニチ』) 一一・一 六・三・三・四教育体</p>

<p>昭和二四年 (一九四九)</p>	<p>六・一 国語審議会設置</p>	<p>第四回芸術祭 参加公演数が六〇を越え、前年の三倍となる。芸術祭文部大臣賞受賞者に賞牌がおくられた(この回限り)。</p>	<p>一・二六 法隆寺金堂焼失 八・一 芥川賞・直木賞復活 一一・三 湯川秀樹、ノーベル物理学受賞 七・二 金閣寺放火により焼失</p>
<p>昭和二五年 (一九五〇)</p>	<p>四・一 芸能選奨(文部大臣賞)制度発足 五・三〇 文化財保護法公布(八・二九施行) 五・三〇 文化財保護委員会設置 八・二九 国立博物館、同館奈良分館及び美術研究所が文化財保護委員会の附属機関となる</p>	<p>第五回芸術祭 国の予算が初めて計上され、これにともない再び「主催公演」中心の芸術祭となる。全国民俗芸能大会が主催公演として加わる。 期間が一〇月一日から一月三〇日の二か月間となる。</p>	<p>一・三三 NHK「第一回紅白歌合戦」放送 三・二二 日本初のLPレコード発売 九・一 民放二局初の正式放送 九・八 サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約調印</p>
<p>昭和二六年 (一九五二)</p>	<p>四・三 文化功勞者選考審査会設置 四・三 宗教法人法公布、宗教法人審議会設置 一一・一 博物館法公布</p>	<p>第六回芸術祭 この年から芸術祭が「主催公演」と「参加公演」及び「アマチュア公演」(音楽コンクール、郷土芸能)の三部に分化し、祝典を行うことを規定</p>	

<p>昭和二三年 (一九四七)</p>	<p>五・三 国立博物館官制公布(皇室博物館及び奈良帝室博物館を宮内省から文部省に移管) 一一・四 帝国芸術院を日本芸術院と改称</p>	<p>三一日までの二か月間</p>	<p>制発表 一一・三 ラジオに「話の泉」登場(初のクイズ番組) 四・一 六・三制教育開始(新制中学発足) 五・三 日本国憲法施行 七・五 NHK「鐘の鳴る丘」放送開始 七・二八 民衆芸術劇場(民芸)結成</p>
<p>昭和二三年 (一九四八)</p>	<p>一一・二〇 国立国語研究所を設置</p>	<p>第二回芸術祭 全公演を「参加公演」とし、優れた公演には文部大臣賞(個人賞、団体賞)を授与することとなった。参加公演は「演劇」「音楽」「舞踊」「古典芸術」の四部門 期間は九月一日から一月三〇日の三か月間となる。</p>	<p>三・八 新橋演舞場再建、開場 一一・一 松竹新喜劇結成</p>

<p>昭和二九年 (二九五四)</p>	<p>五・二九 東京文化財研究所、奈良文化財研究所を東京国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所に改称 七・一 重要無形文化財・重要民俗資料指定制度等発足 一・二・九 「ローマ字のつづり方」内閣訓令・告示</p>	<p>新設。レコードラベルに芸術祭参加が表示。 第九回芸術祭 この年から、自主的公演のうち特に優れたものを選び、その費用の一部を助成し、芸術祭執行委員会との共催とする方式がとられた。 また、初めて「映画部門」が主催公演に加わり、放送部門にテレビの参加が加わった。</p>	<p>一・一・三 日本初の特撮映画「ゴジラ」(東宝、本多猪四郎監督、特撮監督円谷英二)封切り</p>
<p>昭和三〇年 (二九五五)</p>	<p>一・二・六 第一回文化財防火デー実施</p>	<p>第一〇回芸術祭 一〇回目を迎え、舞台芸術、映画・放送等全部門にわたる祭典として定着 劇団民芸の「西の国の人気者」各都市へ巡回公演、移動芸術祭が生まれる先がけとなった。</p>	<p>一・五 大型スクリーンのシネラマ、東京の帝国劇場で初公開され人気 八・七 初のトランジスタラジオ発売</p>

<p>昭和二七年 (二九五二)</p>	<p>四・一 奈良文化財研究所設置(東京国立博物館、京都国立博物館、東京文化財研究所にそれぞれ改称) 六・六 国立近代美術館設置(二・二一開館) 七・三一 東京国立博物館奈良分館が奈良国立博物館として独立</p>	<p>第七回芸術祭 新文化の創造に主眼をおき、歌舞伎(「若き日の信長」)と新劇(「龍を撫でた男」ほか)にそれぞれ創作劇を上演した。 この年より、「大衆芸能部門」が設けられた。 NHKだけであった放送に、民間放送会社も参加。</p>	<p>九・一〇 黒澤明監督「羅生門」ベネチア国際映画祭でグランプリ受賞 四・一〇 NHKラジオ「君の名は」放送開始</p>
<p>昭和二八年 (二九五三)</p>	<p>八・一 文部省地方巡回美術展覧会の開催</p>	<p>第八回芸術祭 一般公募の最優秀作を歌舞伎座で上演(「明治零年」) 演劇は自主的演劇公演が企画された(「鷗」「江島生島」)。 今回から「レコード部門」が</p>	<p>二・一 NHK、東京地区でテレビ本放送開始 八・二八 民間テレビ、本放送開始</p>

昭和三五年 (一九六〇)	昭和三四年 (一九五九)	昭和三三年 (一九五八)	昭和三二年 (一九五七)	昭和三二年 (一九五六)
	<p>四・一 新人美術作品買上制度発足</p> <p>四・一 芸術関係団体に対する補助金制度発足</p> <p>七・二〇 奈良国立文化財研究所による平城宮跡発掘調査開始</p> <p>一一・一〇七 教育・文化週間の実施</p>	<p>四・三〇 日本芸術院会館開館</p> <p>五・一 国立西洋美術館設置(翌年六・一〇開館)</p>		<p>一・二八 万国著作権条約公布</p>
<p>第一五回芸術祭 参加公演の大衆芸能部門に初</p>	<p>第一四回芸術祭 主催公演の演劇の一つに東宝現代劇の菊田一夫作「がめついな」が新作で上演され、芸術祭期間後も続演(翌年七月まで二七〇日間のロングラン)が重ねられ、大衆におおいにアピール(芸術祭賞)</p> <p>参加部門のうち、レコード部門が「国内盤の部」「外国盤の部」、放送部門が「ラジオ部門」と「テレビ部門」に分化</p>	<p>加したテレビの本数が四本からこの年には二二本と急上昇。 テレビドラマ「私は貝になりたい」が大反響を呼ぶ(芸術祭賞)。</p>	<p>第一二回芸術祭 参加部門のうち、映画部門が「日本劇映画の部」「日本記録映画・動画の部」「外国映画の部」の三部に分かれる。 大谷春彦作のレリーフを芸術祭賞の賞牌とした(口絵参照)。</p> <p>第一三回芸術祭 テレビの躍進―第九回から参</p>	<p>第一一回芸術祭 邦画を除く国際映画コンクール「芸術祭外国映画コンクール」を実施</p>
<p>六・五 テレビ放送による高校通信教育を開始</p>	<p>一・一 メートル法施行</p> <p>一・一〇 NHK教育テレビ開局</p> <p>二・一 日本教育テレビ</p> <p>三・一〇 フジテレビ</p> <p>四・一〇 皇太子御成婚パレード、テレビ視聴者推定一五〇〇万人</p> <p>九・二六 伊勢湾台風 この年後半から「岩戸景気」</p>	<p>ムが絶頂期となり、ファンの熱狂ぶりが話題に</p> <p>四・三〇 (財)日展が日本芸術院から独立</p> <p>八・一 日本ビクターが国産初のステレオ・レコードを発売</p>	<p>二・二四 NHK、FM放送開始</p> <p>二・八 第一回日劇ウエスタン・カーニバル。ロカビリー・ブ</p>	<p>一・二三 石原慎太郎「太陽の季節」が芥川賞受賞。「太陽族」「慎太郎列り」流行</p> <p>六・二五 箏曲家・作曲家の宮城道雄が列車から転落死</p> <p>七・一七 『経済白書』を発表。「もはや戦後ではない」と結論、流行語になる。</p> <p>四・二二 明治座全焼</p> <p>四・二五 有楽町芸術座開場</p> <p>四・一 新宿コマ劇場開場</p> <p>九・二 国際ペン大会、東京で開催</p>

	文化行政	芸術祭	社会一般
<p>昭和三七年 (一九六二)</p>	<p>九・二五 公立文化施設協議会の 発足</p>	<p>第一六回芸術祭 狂言を演能会から切り離して 単独公演 ラジオドラマ及びテレビドラ マ脚本の募集ならびにその放送 の企画実施 『芸術祭十五年史』刊行</p>	<p>九・一〇 NHK等、カラーテレ ビ本放送開始</p> <p>一一・二三 映画「ウエストサイ ド物語」封切り。五〇九日間の ロングランに。</p>
<p>昭和三八年 (一九六三)</p>	<p>三・一 東京国立近代美術館京都 分館設置(四・二七開館)</p>	<p>第一七回芸術祭 『芸術祭三市交響楽団特別演 奏会』と銘打って、京都市交響 楽団、群馬交響楽団、札幌交響 楽団が高崎市で主催公演として 競演</p>	<p>三・一 テレビ受信契約者数一千 万突破(普及率四八・五%)</p> <p>一・一 フジテレビで「鉄腕アト ム」放送開始。国産アニメの第 一</p>
<p>昭和三九年 (一九六四)</p>	<p>四・八 国立西洋美術館にてミロ のピナクス展開催。期間中八三 万人入場</p>	<p>第一八回芸術祭 世阿弥の生誕六〇〇年記念行</p>	<p>一〇・一 紀伊國屋ホール開場</p> <p>一〇・一 東海道新幹線開業</p> <p>一〇・一〇 東京オリンピック大 会(一〇・二四)</p>
<p>昭和四〇年 (一九六五)</p>	<p>八・二一 ッタンカーメン展開幕 (東京国立博物館)</p>	<p>事として「芸術祭能」を実施</p> <p>第一九回芸術祭 オリンピック東京大会芸術展 示として、芸術祭の主催公演の 中から、宮内庁楽部の「雅 楽」、「オリンピック能楽 祭」、「人形浄瑠璃文楽」、松 竹の「十月大歌舞伎」、「古典 舞踊邦楽祭」、「全国民俗芸能 大会」が参加 参加公演(作品)のうちテレ ビ部門が「テレビドラマの部」 と「テレビドキュメンタリー の部」に分化</p> <p>第二〇回芸術祭 「芸術祭合唱演奏会」、「世 界名作映画フェスティバル」を</p>	<p>一〇・二一 朝永振一郎、ノーベ ル物理学賞受賞</p>

	文化行政	芸術祭	社会一般
昭和四一年 (一九六六) 昭和四二年 (一九六七)	四・五 文部省に文化局設置 四・二八 文化財愛護モデル地区指定制度始まる。 五・三〇 文化財愛護シンボルマーク決定 六・二七 国立劇場法(現、日本芸術文化振興会法)公布 七・一 特殊法人国立劇場発足(一一・一開場)	実施した。 この年より、舟越保武作のレリーフを芸術祭賞牌とした(口絵参照)。 第二回芸術祭 芸術祭賞及び芸術祭奨励賞の賞金額の増額(五万円→一〇万円・二万円→五万円)及び大衆芸能の部門を一部(落語、講談、漫才、浪曲、大衆演劇等)と二部(ショー、ポピュラー・ミュージカル等)に区分	三・三一 日本の人口一億人突破 四・四 NHKテレビ「おはなはん」放送開始 六・三〇 ザ・ビートルズ、日本武道館で公演 七・一四 世界的な所有権機関(WIPO)設立 七・二八 ラジオ受信料廃止決定

昭和四三年 (一九六八) 昭和四四年 (一九六九)	七・四 芸術家在外研修制度発足 六・一五 文化庁設置、初代長官に今日出海就任 六・一五 文化財保護審議会設置 九・一五 「文化庁月報」創刊 一〇・一一 東京国立博物館東洋館開館 六・一一 東京国立近代美術館新館開館 六・一三 第一回地方芸術文化振興会議開催(全国八地区)	第三回芸術祭 文化庁が発足し、芸術祭は文化庁主管となる。明治百年を記念した「明治百年記念芸術祭」の名のもとに演劇、オペラ、バレエの創作公演ならびに「アジア民族芸能祭」の公演が実施された。 第二回芸術祭 芸術祭開催要綱の改正 (1)開催期間の短縮 (2)主催公演の期間と参加公演の期間を区別 (3)協賛公演を加える (4)実演芸術の参加期間と映画、ラジオ、テレビ等の作品参加の期間を区別 (5)賞の名称を芸術祭大賞と優秀賞に改める。	一〇・一七 川端康成、ノーベル文学賞受賞 一一・一 明治百年祭挙行
------------------------------------	---	---	--------------------------------------

	文化行政	芸術祭	社会一般
<p>昭和四五年 (一九七〇)</p>	<p>五・六 新著作権法公布(四六・ 一・一施行。保護期間五〇年) 五・二七 東京国立近代美術館フ イルムセンター開館 一・一五 文化財保護法二〇周年 記念式典挙行</p>	<p>また、この年より、高田博厚 作のレリーフを芸術祭賞牌とし た(口絵参照)。 第二五回芸術祭 主催公演を一〇月前半に集中 することにより、フェスティバ ルの性格を強く打ち出す。</p>	<p>三・五 吹田市で大阪万国博覧会 開幕 七・一四 閣議、日本の呼称を 「ニッポン」に統一することを 了承</p>
<p>昭和四六年 (一九七一)</p>	<p>六・二一 勲文化財建造物保存技 術協会設立、修理技術後継者養 成を開始</p>	<p>第二六回芸術祭 「移動芸術祭」が発足</p>	<p>二・三 第一一回札幌冬季五輪大 会開幕 四・一六 川端康成死去 五・一五 沖縄の本土復帰</p>
<p>昭和四七年 (一九七二)</p>	<p>三・二一 奈良県高市郡明日香村 の高松塚古墳で壁画発見 七・二 「美をもとめて」放映開 始 七・二〇 優秀映画製作奨励金交 付制度発足</p>	<p>第二七回芸術祭 海外各地で活躍している邦人 芸術家を主催公演の機会に招へ いし、技法を披露する、新規事 業を開始</p>	<p>一〇・一九 第一次石油ショック 一〇・二三 江崎玲於奈、ノーベ ル物理学賞受賞</p>
<p>昭和四八年 (一九七三)</p>	<p>四・二六 芸術文化指導者海外派 遣制度発足 六・一八 「当用漢字音訓表」 「送り仮名の付け方」内閣訓 令・告示</p>	<p>第二八回芸術祭 この年から「移動芸術祭」、 春季公演も実施</p>	<p>八・二九 宝塚歌劇団「ベルサイ ユのばら」(池田理代子原作) 初演。ベルバラブームを起こ す。 一〇・八 佐藤栄作前首相、ノー ベル平和賞受賞</p>
<p>昭和四九年 (一九七四)</p>	<p>四・一一 奈良国立文化財研究所 に埋蔵文化財センター設置 四・二〇 東京国立博物館にてモ ナ・リザ展開催。期間中に一五 〇万人入場 八・一 ことも芸術劇場発足</p>	<p>第二九回芸術祭 主催公演でポピュラー・ミュー ジック(「ミュージック・フ ェスティバル日本のリズム・世 界のリズム」)を初めて取り上 げる。 また、賞金額が増額され芸術 祭大賞(二〇万円→二〇万 円)、芸術祭優秀賞(五万円→ 一〇万円)となった。</p>	<p>三・一〇 新幹線岡山―博多間開 通</p>
<p>昭和五〇年</p>	<p>三・六 ベルヌ条約バリ改正条約 公布</p>		

<p>(二九七八) 昭和五三年 (一九七八)</p>	<p>六・二七 文化庁創設一〇周年記念功労者表彰式</p> <p>一一・一五 東京国立近代美術館 工芸館開館</p>	<p>第三三回芸術祭 芸術祭特別公演「ミュージック・フェスティバル'78『華麗なるクロス・オーバ―の世界』」でジャズ、ロック、フォークとクラシックの交流・融合を試みる。 主催公演を大阪でも実施</p>	<p>五・二〇 成田空港（「新東京国際空港」）開港 一〇・一一 レコード保護条約公布</p>
<p>(二九七七)</p>	<p>懇談会「まとめ」公表 五・二〇 国立国際美術館設置（一〇・一五開館） 六・七 芸術家国内研修制度発足 七・三〇 第一回全国高等学校総合文化祭を千葉市で開催 一一・一五 国立民族学博物館開館 一一・一五 東京国立近代美術館 工芸館開館</p>	<p>特別公演として「日本民謡まつり」がスタート</p>	<p>最終公演 八・三 万国著作権条約バリ改正条約公布 九・三 王貞治七五六号ホームラン（国民栄誉賞第一号）</p>

<p>(二九七五) 昭和五二年 (一九七六)</p>	<p>三・一五 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館開館 七・一 改正文化財保護法公布（二〇・一施行）</p>	<p>芸術祭三〇周年の記念事業として「アジア民族芸能祭」を開催 記念の年にあたり芸術祭期間を半月延長して二か月間とする。 賞金額を芸術祭大賞三〇万円、芸術祭優秀賞一五万円とする。</p>	<p>業。東京―博多間開通</p>
<p>昭和五二年 三・二三</p>	<p>文化行政長期総合計画</p>	<p>第三一回芸術祭 参加公演のうち音楽部門と舞踊部門をそれぞれ一部（邦楽・邦舞系）二部（洋楽・洋舞系）に分化 期間は再び一〇月一日から一月一五日の一月半月となる。 『芸術祭三十年史』刊行</p>	<p>四・二五 日劇ダンシングチーム</p>
<p>昭和五二年 五・一二</p>	<p>子ども向けテレビ用優秀映画製作奨励金交付制度発足 一〇・一 国立国語研究所に日本語教育センター設置</p>	<p>第三一回芸術祭 参加公演のうち音楽部門と舞踊部門をそれぞれ一部（邦楽・邦舞系）二部（洋楽・洋舞系）に分化 期間は再び一〇月一日から一月一五日の一月半月となる。 『芸術祭三十年史』刊行</p>	<p>三・二九 第四八回アカデミー賞で、黒澤明監督『デルス・ウザラ』、最優秀外国語映画賞受賞</p>

<p>(一九八二)</p>	<p>設置</p>	<p>第三八回芸術祭 参加部門のうち、レコード部門の「国内盤の部」と「外国盤の部」を「レコード部門」に、ラジオ部門の「ラジオ音楽の部」と「ラジオ合唱の部」を「ラジオ音楽の部」にそれぞれ一本化</p>	<p>修理完了し、落成式 四・五 浅草国際劇場SKD最終公演 七・二四 富山県利賀村で利賀フェスティバル'82、第一回世界演劇祭 四・四 NHK朝の連続テレビ小説「おしん」スタート、六〇%の高視聴率 五・一九 第三六回カンヌ映画祭で今村昌平監督の「楢山節考」がグランプリ受賞</p>
<p>昭和五八年 (一九八三)</p>	<p>三・一六 国立歴史民俗博物館開館 九・一五 国立劇場能楽堂開場 一・一 第一回地域文化功労者表彰</p>	<p>第三九回芸術祭 初めての名古屋公演として、「オーケストラフェスティバル・イン・ナゴヤ」を開催</p>	<p>六・三〇 厚生省「世界一の長寿国」と発表 一・一 日銀、新札発行、一万円(福沢諭吉)、五千円(新渡戸稲造)、千円(夏目漱石)</p>
<p>昭和五九年 (一九八四)</p>	<p>三・二〇 国立劇場文楽劇場開場 四・一 中学校芸術鑑賞教室発足 七・一 文化庁の機構改革(総務課、伝統文化課設置)</p>		

<p>昭和五四年 (一九七九)</p>	<p>三・二二 国立劇場演芸資料館開場 一・二二 国立西洋美術館新館開館</p>	<p>第三四回芸術祭 三月にオープンした国立演芸場において「はなしの春夏秋冬」開催</p>	<p>一・一三 国立大学の共通一次試験初実施</p>
<p>昭和五五年 (一九八〇)</p>	<p>四・五 奈良国立博物館に仏教美術資料研究センター設置 七・一 京都国立博物館文化財保存修理所業務開始 七・一 ことも芸術劇場、青少年芸術劇場の離島・へき地公演発足</p>	<p>第三五回芸術祭 参加公演の音楽・舞踊の一部(邦楽・邦舞系)、二部(洋楽・洋舞系)を一本化。大衆芸能を一部(寄席芸ほか伝統的な芸能)と二部(ミュージカル・レビュー・ショーなどの外来様式の舞台芸能)とに分化</p>	<p>五・一 黒澤明監督「影武者」、カンヌ映画祭でグランプリ受賞</p>
<p>昭和五六年 (一九八一)</p>	<p>四・三 京都国立博物館に京都文化資料研究センター設置 一〇・一 「常用漢字表」内閣訓令・告示</p>	<p>第三六回芸術祭 参加公演の参加総数が芸術祭史上最高の件数(二九二件)</p>	<p>一〇・一九 福井謙一、ノーベル化学賞受賞</p>
<p>昭和五七年</p>	<p>四・六 東京国立博物館に資料部</p>	<p>第三七回芸術祭</p>	<p>三・二七 桂離宮、初の全面解体</p>

<p>昭和六三年 (一九八八)</p>	<p>六・一 『我が国の文化と文化行政』(文化白書) 刊行</p>	<p>第四三回芸術祭 主催公演のオペラ「メリー・ウイドー」は、文化庁が派遣した芸術家在外研修員及びオペラ研修所の修了生を中心にスタッフ、キャストが組まれた。さらに、創作作品の募集開始一〇年を記念し、「邦楽器」による作品の入賞作品と「合唱曲」の入賞作品の披露演奏会を開催</p>	<p>七・九 日本人の平均寿命、男七五・二三歳、女八〇・九三歳。男性が七五歳を超えたのは世界初と、厚生省発表 八・七 臨教審最終答申 九・七 劇団「新国劇」七〇年の歴史に幕 一〇・一二 米MITの利根川進教授、ノーベル医学生理学賞受賞 三・一三 世界最長の青函トンネル(五三・八五km) 開通</p>
-------------------------	-----------------------------------	--	--

<p>昭和六〇年 (一九八五)</p>	<p>文化行政</p>	<p>第四〇回記念芸術祭 芸術祭の見直しを行い、フェスティバル化、地方の拡充、国際化を図る。 芸術祭四〇周年とNHK放送開始六〇年を記念した「アジア民族芸能祭」が特別公演として開催されたほか、初めて県との共催による「芸術祭地方公演」を、熊本で開催</p>	<p>六・二六 臨教審、第一次答申 九・二五 藤ノ木古墳石棺発見 四・二九 東京・両国の国技館で、政府主催の天皇在位六〇年記念式典開催 四・一 日本国有鉄道分割・民営化</p>
<p>昭和六二年 (一九八七)</p>	<p>一〇・四 国立劇場二〇周年記念公演「仮名手本忠臣蔵」全段通し上演 一一・二二 第一回国民文化祭開催(東京)</p>	<p>第四一回芸術祭 日本初演四〇周年を記念し、バレエ「白鳥の湖」を上演 芸術祭シンボルマーク制定(朝倉撰作)(口絵参照) 第四二回芸術祭 国際公演は、日タイ修好百周年</p>	<p>四・二九 東京・両国の国技館で、政府主催の天皇在位六〇年記念式典開催 四・一 日本国有鉄道分割・民営化</p>

	文化行政	芸術祭	社会一般
昭和六四年 平成元年 (一九八九)	三・三一 特殊法人国立劇場が第二国立劇場(仮称)の設置者となる。 一〇・三 実演家等保護条約公布	第四四回芸術祭 主催公演のメイン・イベントとして現代舞踊、琉球舞踊、日本舞踊、新作バレエの「舞踊三人展シリーズ」を実施	一・七 天皇陛下崩御、八七歳。 新元号は「平成」 四・一 消費税の導入により入場税撤廃
平成二年 (一九九〇)	三・三〇 国立劇場を日本芸術文化振興会と改称。芸術文化振興基金(政府出資五〇〇億円・民間出捐金一〇〇億円)を創設	第四五回芸術祭 天皇皇后両陛下下の行幸啓のもと、恒例の芸術祭祝典は「雅楽の現在」武満徹・もうひとつの世界」で開幕	五・一九 雲仙・普賢岳噴火で土石流発生 六・一五 一九九八年冬季五輪は長野に決定
平成三年 (一九九一)	六・二八 「外来語の表記」内閣告示、内閣訓令	第四六回芸術祭 「荒城の月」発表九〇年目に当り、「日本歌曲の一系譜」と題したコンサートを開催。洋楽は日本オーケストラ連盟とタイアップし、全国にある一八のプロオーケストラの代表的奏者が一堂に会し「オール・ジャパン	
平成四年 (一九九二)	八・二六 第二国立劇場(仮称)建設工事着手	・シンフォニー・オーケストラコンサートを実施 第四七回芸術祭 沖縄の本土復帰二〇周年を記念し、祝典(「舞踊三趣四題」江戸、上方そして琉球)」、舞踊(「琉球舞踊新鋭展」)、歌舞劇(「首里城物語」)を実施。地方芸術祭も沖縄県で開催	九・二二 毛利衛、スペースシャトル打ち上げ(日本人初)
平成五年 (一九九三)	四・一六 勅第二国立劇場運営財団設立	第四八回芸術祭 文化庁創作奨励特別賞受賞者の中から女流劇作家を取り上げ「劇作三人展」を開催	五・一五 日本初のプロサッカーリーグ、Jリーグが開幕 六・九 皇太子殿下御成婚
平成六年 (一九九四)	一・一一 文化政策推進会議「文化発信社会」の基盤の構築に向けた文化振興のための当面の重点方策について」提言	第四九回芸術祭 バースタイン作曲の「ミサ」をシアターピイス形式で上演。また、箏曲家宮城道雄の生	七・八 日本人女性初の宇宙飛行士向井千秋の乗ったスペースシャトル・コロンビアがケネディ宇宙センターから打ち上げられ

		<p>カ国から芸能団を招へいするな ど多彩なプログラムにより 実施</p> <p>また、芸術祭賞に大賞・優秀 賞・新人賞を設け、さらに芸術 祭シンボルマーク、副賞（トロ フィー）を改新、そのデザイン を多田美波に委嘱（口絵参照）</p>	
--	--	--	--

<p>平成七年 (一九九五)</p>	<p>文化行政</p> <p>六・二七 文化政策推進会議「二 一世紀に向けた文化政策の推進 について」報告</p> <p>七・一 文化庁の組織再編成で芸 術文化課、地域文化振興課が設 置</p> <p>一・二五 音楽文化の振興のた めの学習環境の整備等に関する 法律の公布（「国際音楽の日」 制定）</p> <p>一・二八 世界貿易機関（WT O）協定公布</p> <p>七・二六 文化政策推進会議「新 しい文化立国をめざして―文化 振興のための当面の重点施策に ついて―」報告</p> <p>一〇・一 「国際音楽の日」記念 コンサート実施</p>	<p>芸術祭</p> <p>第五〇回記念芸術祭</p> <p>半世紀の記念すべき芸術祭 は、天皇皇后両陛下の御臨席の もと開幕の祝典を挙行。オペ ラ、バレエ及び現代邦楽の三分 野について創作委嘱公演を実 施。国際公演は、世界各地、八</p> <p>誕百年を記念した「宮城道雄の しらべ」の演奏会を行うととも に、世界に発信する平成ポップ ス「サルサ&ポップス'94」を開 催</p>	<p>社会一般</p> <p>た（七・二三帰還）。</p> <p>一〇・一四 大江健三郎、ノーベ ル文学賞受賞</p>
------------------------	--	---	---